

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 赤い部屋の恋人

配給/日本ビクター、トライエム

2003 (平成15) 年8月15日鑑賞

Data

監督: ウェイン・ワン

原案: ウェイン・ワン、ポール・オースター

出演: モリー・パーカー/ピーター・サースガード/カーラ・グギーノ

### 👁️👁️ みどころ

ネット長者の孤独な若い男が、ストリッパーに恋をした・・・。「ビジネス」と割り切っていたはずの女も、3日間の旅行の中で男の優しさに惹かれ、心の中の矛盾が次第に大きくなっていった。現代人の孤独と不毛な恋愛をテーマに描いたフランス映画のような官能的な恋愛モノ。性的描写の生々しさや過激な言葉などエロティックな魅力も十分。マイナーな映画館でのマイナーな作品だが、恋愛経験豊富(?)なオジサンにはおススメだ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <原題と邦題>

この映画の邦題は「赤い部屋の恋人」と訳されている。エロティックな雰囲気やうまく出したい感じの日本語訳だが、原題はこれとは全く違う「Center of The World」。

パンフレットの中の斎藤英治氏(翻訳家・明治大学助教授)のエッセイによると、この作品はどうしても2001年9月11日の世界同時多発テロの悲劇に結びつけて考えたい、と書かれている。すなわち、この映画のタイトル「Center of The World」と、9・11テロで破壊された世界貿易センタービル「The World Trade Center」は実によく似ており、欠けているのは「貿易」、「商業」、「取引」等を意味する”Trade”という言葉だけ。そして、この映画が描くのは、まさにその”Trade”としてのセックスである、というのだ。

しかし、これは私にいわせれば、あまりにもわざとらしい、無理なこじつけ。「Center of The World」というタイトルの由来は、「スケベな」私の感覚では、

ストリッパーの女主人公フローレンスが語る、「アソコは世界の中心なの！」という言葉だと思う。「アソコは世界の中心なの！」とは何とも過激な言葉だが、この映画はまさにそのテーマを描いたものだ。

### <ポール・オースターという作家とその映画創作活動>

ポール・オースターは、1947年ニュージャージー州生まれの作家。彼が作家として有名になったのは、1985年～1986年にかけて出版された『シティ・オブ・グラス』、『幽霊たち』、『鍵のかかった部屋』という、いわゆる「ニューヨーク三部作」小説だ。そしてポール・オースターが脚本を書き、ウェイン・ワンが監督した映画『スモーク』（1995年）は、人間ドラマの佳作として、ベルリン国際映画祭で特別銀熊賞を受賞した。

本作品はこの2人のコンビによる最新作で、2001年のアメリカ映画。そこで描かれるのはストリッパーの女とネット長者の男との間の官能的なラブストーリー。パンフレットによると、あまりの過激な性描写にシンシナティ劇場では官能シーンをカットして上映されたり、タイムズ系新聞社では広告掲載を拒否された、という話題作だ。

私はこんな映画を、2003年8月15日、マイナーな映画館の中、一人で、わずかに数名の観客と共に観た。

### <テーマは孤独>

ラブストーリーといっても、本作はかなり異色。ハリウッド映画というよりフランス映画の感覚に近い。登場人物も2人の主人公以外はごくわずかだけ。1時間27分の上映時間中ほとんど2人だけがスクリーンに登場している。

主人公リチャード・ロングマン（ピーター・サースガード）は、まだ20才前半のネット長者。そんなリチャードがコーヒョップで出会ったストリッパーに恋をした……。お金は持っていても真の友人や孤独な気持ちを分かってくれる恋人のいない彼は、ストリッパーの彼女に何を求めたのか？

他方、フローレンス（モリー・パーカー）は、ロックバンドでドラムを叩いているが、それだけでは生活できない。そこで生活費を稼ぐため高級クラブ「パンドラの箱」でストリッパーの仕事をしている。店の中では自分の肉体を、好色な男たちの目にさらしているが、フローレンスも決して自分の本当の姿は誰にも見せていない。孤独な心は彼女も同じ。当然、リチャードからの「旅行」の申出に対しても、ビジネス的に対応。なぜなら、一人の「お客」以上の対応をすれば、自分が「破壊」されることが分かっているから……。

### <2人の契約は？公序良俗違反・・・？>

リチャードはフローレンスに対し、3日間のラスベガスへの旅行を提案。もちろん自分のネットの仕事はすっぽかしてもいいという判断だ。しかし余計な感情が入り込むことを

避けようとするフローレンスは、「金のためにセックスしない」と言って、この誘いを断ろうとするが、リチャードに惹かれているフローレンスの心は揺れた。

そして、次の5つの条件すなわち

①口へのキスはダメ、②感情についての質問をしないこと、③性交をしないこと、④彼女の部屋を確保すること、⑤拘束時間は午後10時から午前2時までとすること、をオーケーすることを条件として、ラスベガスへの旅行を承諾した。もちろん旅行費用はすべてリチャード持ち、そしてフローレンスの休業中の収入も保証付きだ。

このような「愛人契約」(?)の法的効力は微妙で、もし2人間の関係がこじれてケンカになった場合はややこしい。もっともこんな発想をして、こんなつまらない解説をする法律家は嫌われて当然。なぜなら我々はテレビの人気番組『行列のできる法律相談所』の番組を観ているのではなく、男女の愛の本質を描くラブ・ロマンスの映画を観ているのだから……。

### <条件の遵守は可能だったか?>

1日目。夜10時きっかりにフローレンスは美しく化粧をしてリチャードの前に現われた。そしてリチャードは、フローレンスとの直接の性交は無くとも、すばらしい夜を過ごした。

しかし2日目、3日目と時間が過ぎ、2人の仲が親密になるにつれて、フローレンスはリチャードの優しさを一層感じ、次第にリチャードに惹かれていった。もちろんリチャードはフローレンスとの正常な「性交」を望んでいるが、それを強要することは契約違反となってしまう。このような状況下、必死で自分の気持ちを押しえようとするフローレンスの心の葛藤が、フランス映画のように描かれる。そしてエロティックな場面の描写もすごく真実味がある。

もっとも最初から少し難点だと思ったのは、フローレンスを演ずるモリー・パーカーの肌にソバカスやしみが多いこと。モリー・パーカーは、『太陽の雫』(1999年)などに出演している演技力抜群の女優であることは認めるものの、透き通った、白い美しい肌の女性の方がもっとエロティックでいい感じなのに……とどうしてもスケベオヤジの私としては思ってしまう。失礼しました……。

それはともかく、3日間を一緒に過ごす中、2人の愛情の高まりは遂に「一線」を超え、結果として当初定めた条件は守られなかった。そうすると……。

### <オシャレなラストシーン>

これ以上は書かない方がいいだろう。

とにかく男と女の愛とセックスは難しいものだ。もっとも、そうだからこそ、昔から永遠のテーマとしてそれが小説や映画に描かれるのだが……。

この映画のラストシーンは再び高級クラブ「パンドラの箱」の中。映画の冒頭に描かれた、昔のあの日と同じように、再びリチャードが店を訪れた。そして、その前にはフローレンスが。そしてフローレンスは昔と同じように、ハイヒールをはいた脚を、リチャードのスーツの胸まで上げながらの会話だ。

リチャード：すごくきれいだね。

フローレンス：何が好みかしら？

リチャード：何ができるの？

フローレンス：いつものやつを？

リチャード：じゃ、それを。

フローレンス：ラップ・ダンスね。2曲で、60ドルよ。

何ともオシャレなラストシーン。

恋愛経験豊富な(?)年配の男女の方々におススメの作品。2人で観れば一層いいのかも・・・。

2003 (平成15) 年8月17日記